

栃木県埋蔵文化財 センターだより

発行 令和2(2020)年3月23日
栃木県教育委員会
宇都宮市埴田1-1-20
電話 028-623-3425
編集 (公財)とちぎ未来づくり財団
埋蔵文化財センター
下野市紫474
TEL 0285-44-8441 (代表)
FAX 0285-43-1972
URL <http://www.maibun.or.jp>

CONTENTS

- 埋蔵文化財センターが実施した発掘調査から
城ノ内遺跡(上三川町)
- 市町教育委員会が実施した発掘調査から
大坂遺跡(下野市)
- 特集 弥生時代—埋蔵文化財センター常設展示室から—

- 市町教育委員会が実施した発掘調査から
塚崎遺跡(小山市)
橋向遺跡(小山市)
鏡田遺跡(小山市)
- 埋蔵文化財センター普及事業の紹介

2020
3月

埼玉から来ました！



とちぎ発掘イッピン図鑑

にしたかはし
西高椅遺跡(小山市)の古墳群で発掘された27号円墳から出土しました。
髪を「みずら」に結び、頭巾のような物をかぶり、顔に赤色を塗った男子で、鼻や耳の穴も表現されています。左肩にのせている刀には、握る手を保護するための赤いベルトが「」の形で付いています。白い服を着た女子2体、馬飼いの男子、刀を腰につけた武人、馬の埴輪と一緒に出土しました。物を肩にのせるしぐさ、細い眼、埴輪に使われている粘土に含まれる元素の量などから、およそ50km離れた埼玉県北部地域で作られた埴輪と考えられます。

埋蔵文化財センターが実施した発掘調査から 城ノ内遺跡（上三川町）



大溝検出状況（北から）

県道建設工事に先立ち、平成 30(2018) 年度から城ノ内遺跡の発掘調査を行っています。令和元 (2019) 年度の調査では、奈良・平安時代の竪穴建物跡 20 軒、掘立柱建物跡 3 棟、中世の地下式坑 4 基、大溝などを調査しました。特に注目されるのは、昨年度の調査区から続く多功城の堀と推定される大溝跡が、本年度の調査で東西方向から南側に曲がって続いていることが分かったことです。また、大溝に沿って新旧 2 時期の柵列を発見するなど、新たな成果を得ることができました。



大溝屈曲部検出状況（北から）



古代の掘立柱建物

市町が実施した発掘調査から おおざか 大坂遺跡（下野市）



調査区上空写真



1辺8mを超える竪穴住居跡

大坂遺跡は田川東岸の台地上に所在します。遺跡は広範囲に及び、これまでに実施した第1次・2次の調査では、奈良時代から平安時代のムラの跡が確認されています。令和元(2019)年度の第3次調査区は、過去の調査区の東にある浅い谷を挟んだ反対側に立地しており、これまでと異なる古墳時代前期の集落が見つかりました。

また、本遺跡周辺の古墳時代前期の遺構としては、これまでに、薬師寺南遺跡では、昭和49(1974)年の調査で、竪穴建物10軒・方墳1基、田中道光山遺跡では、平成19(2007)年の調査で、方墳4基が確認されています。今回の発掘調査は南河内中学校区義務教育学校の建設に伴い実施されたものです。約4,000㎡を対象に発掘調査を実施した結果、竪穴建物跡が10軒、古墳(方墳)が1基、溝跡2条が見つかりました。見つかった竪穴建物跡の規模は、平均すると1辺6m程度になりますが、1辺8mを超える大きなものが1軒見つかりました。また、前期古墳の墳丘に飾られるような有段口縁の壺形土器、白色粘土が詰まった壺形土器などの変わった遺物が見つかった竪穴建物跡もあります。これらの遺構は、出土した土器から古墳時代前期(4世紀前半)のものであると考えられ、隣接する薬師寺南遺跡と同じころのムラであることが分かりました。



竪穴住居出土有段口縁壺



白色粘土の入った壺

特集 弥生時代

—埋蔵文化財センター常設展示室から—

弥生土器の特徴

弥生土器には、貝殻やヘラの先、櫛の歯のような道具によって、線を引いたりして、いろいろな文様が画かれます。

土器の形とこれらの文様から地域や時期を知ることができます。一般的に縄目の文様がある土器が縄文土器で、縄文のないものが弥生土器と思われがちですが、栃木県では、弥生時代を通して縄文が文様として使われています。



へび塚遺跡（佐野市）出土の弥生土器

すまい

栃木県の弥生時代の規模の小さなもの。方南部以西で発見。建物を溝で囲っていません。住まいは伝統的な竪穴住居。



からすもり
烏森遺跡

くらし

弥生時代になると水田による米作りを始めます。栃木県ではまだ、確実に弥生時代の水田跡と分かる遺構は発見されていませんが、下野市山王遺跡では畑の跡の可能性のある遺構が発見されています。また、稲粃の痕が付いた土器が発見されたことから、米作りも行われたと考えられます。



さんおう
山王遺跡（下野市）の畑跡？



粃痕の付いた土器
ごしんでん
御新田遺跡（壬生町）

米づくりと金属器の使用が始まった時代を「弥生時代」と呼びます。大陸から稲作の技術や金属器が伝わりました。人々は稲作を行い、収穫した米を蓄えるための高床の倉庫等を作ることができるようになりました。蓄えられたお米を巡って戦いが始まったのもこの時代です。

（竪穴住居）

弥生時代のムラは、2～3軒の住居が一般的で、関東地方にも見られる、10軒以上の環濠集落は見つかっていません。縄文時代以来の伝説に生きていたようです。



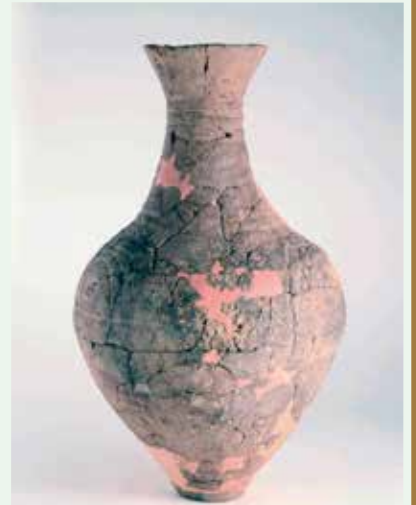
下野市（下野市）の竪穴建物

お墓（再葬墓）

教科書などに登場する大型の土器に埋葬した甕棺は、九州北部の特徴です。栃木県を含む東日本では、人骨の入った頸の長い壺が穴に複数収められた状態で発見されています。死者を一度埋葬し、白骨化した骨を壺に収めて埋葬した墓を「再葬墓」と呼びます。



清六川遺跡（野木町）の再葬墓



清六川遺跡（野木町）の壺

くらしの道具

県内各所より出土した弥生時代の石の道具



栃木県では、弥生時代になっても、縄文時代以来の狩猟や漁労・植物採集がさかんに行われていました。

鉄器

鉄器は縄文時代にはなかった道具で、武器や工具として使われました。栃木県で使用されるのは弥生時代の終わり頃です。



山王遺跡（下野市）出土鉄剣

市町が実施した発掘調査から

つかざき はしむこう かがみだ 塚崎遺跡・橋向遺跡・鏡田遺跡（小山市）



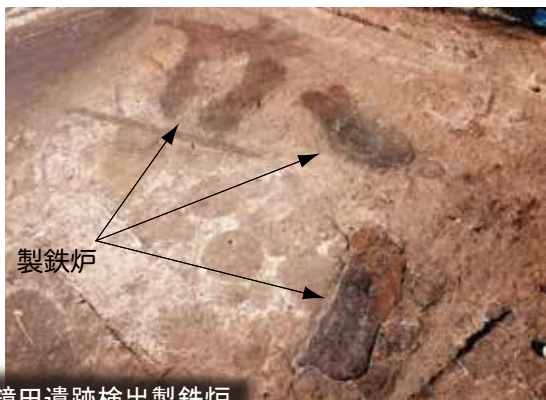
15.5ha に及ぶ工業団地開発に先立ち、平成 31 (2019) 年 4 月から 10 か月かけて 3 地点 計約 8,400 m² の発掘調査を実施しました。竪穴住居跡 21 軒・掘立柱建物跡 6 棟・井戸跡 7 基・溝跡 11 条などを調査しています。現在は令和 4(2022) 年度の報告書刊行に向けて整理作業の途中ですが、3 地点の注目すべき点について紹介したいと思います。

塚崎遺跡では、旧石器時代の遺物集中区 2 か所と共に、陥し穴 1 基を調査しました。この陥し穴は台地から低地に向かう斜面地に、長さ 1m30cm 以上・幅約 50cm の楕円形で、約 1m 掘り込んで設けられたものです。旧石器時代の中でも新しい時期のものですが、底部に逆茂木等の罨はなかったようです。この時期の陥し穴は全国的にも珍しく、今後、出土した炭の年代測定等を通じて更に詳細に分析を進めていきたいと考えています。



塚崎遺跡検出陥し穴

鏡田遺跡においては、こちらも県内では極めて珍しい平安時代の製鉄炉跡を調査しました。1つの炉を何度も使い、炉が壊れると少しずつ場所を変えながら何度も炉を築き、継続的に製錬（砂鉄・木炭から鉄を製造すること）が行われていたことが分かりました。大川や西仁連川を通じて周辺から集められた材料を用いて多くの鉄が生産され、各所に出荷されて武器や道具に加工されたことでしょう。



鏡田遺跡検出製鉄炉

その出荷先の1つとして想定されるのが橋向遺跡です。ここでは奈良・平安時代の集落を発掘し、寺院や倉庫と考えられる掘立柱建物群や屋根をかけた井戸跡、集落の外周を示す柵列等とあわせ、9世紀中頃の鍛冶工房跡が見つかっています。工房の中には鉄を熱するための炉やそこに空気を送り込むための羽口、鎚を振るう職人が構えた掘り込み等、現代の野鍛冶の工房と変わらないものが残されていました。今回の調査の結果からは、この地域は鉄の生産から製品加工まで行う、古代の「製鉄コンビナート」であったと言えるでしょう。



橋向遺跡検出鍛冶工房

写真・資料提供 小山市

埋蔵文化財センター—普及事業の紹介 (1)

濱田庄司記念益子参考館

土偶作り講座

今回の企画は、「工芸を感じてみよう—縄文・土偶—」と題し、館蔵品に親しんでもらうことを目的に、青森県三厩村宇鉄出土の土偶をモデルとした土偶作り講座を令和元(2019)年8月4日に開催しました。



工房での土器作り



講演会の様子

◇土偶をつくった縄文人

土偶を作る前に、縄文人が、どんな環境で、何を感じて土偶を作ったかをイメージするための講演会です。顔面表現や四肢のない姿として登場し、5,000年という試行錯誤の末、女神としての姿を備え、弥生時代には“蔵骨器”として終焉を迎えるという土偶の歴史を辿り、現在一般的にとらえられているマスコットの的な姿とは異なる土偶像を伝えました。

◇ワークショップ「土偶をつくる」

別々に行われることが多い講演会と考古遺物の復元・製作講座を1つのセットとした試みでした。考古遺物の歴史的理解をしたうえでの製作は、モノを作る楽しみに留まらず、当時の人々の考え方や感覚をイメージするところまで踏み込めたようです。



参加者復元土偶を触る



講師による指導



参加者の作品

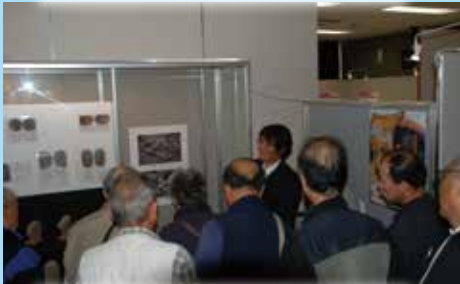
埋蔵文化財センター普及事業の紹介(2)



太田博之氏の特別講演



調査報告会の様子



調査担当者による展示解説

発掘調査速報展・報告会

令和元(2019)年10月1日から11月29日まで、栃木県埋蔵文化財センター展示室で発掘調査速報展を開催し、前年度に発掘調査や整理作業をした①城ノ内遺跡、②会橋久保経塚、③松の木遺跡、④西高椅遺跡の出土品を展示しました。

97基の古墳を調査した西高椅古墳群からは、多数の埴輪が出土しました。27号墳からは、埼玉県比企地方の特徴がある人物埴輪が出土しました(表紙写真)。そこで、10月27日には、古墳と埴輪に詳しい埼玉県本庄市教育委員会の太田博之氏を講師にお迎えし、「北武蔵および周辺地域の古墳と埴輪」と題する講演会を行い、65名の方々が受講しました。埼玉県を中心とする古墳群の変遷と西高椅古墳群を造った人々が、埼玉県をはじめ周辺地域と交流していたことについて、分かりやすいお話を聞くことができました。

午前中には発掘調査報告会を行い、展示した4遺跡の調査成果を、担当者が映像を用いて解説しました。

県庁ミニ展示 1月27日(月)~2月21日(金)

埋蔵文化財センターでは、毎年、県庁本館2階のショーケースをお借りして、ミニ展示を行っています。

今回の展示は、縄文土器に描かれた文様の意味を読み解くことに挑戦しました。縄文土器の中に、我々から見て“顔面”を表現したと思える突起があります。この突起を顔面と見立てると、顔面から蛇のような長い胴体が付いているように見えるので、生き物を表現していると考えてみました。そうすると、土器の器面に何匹かの生き物が描かれていることとなります。よく見るとそれぞれ微妙に異なります。同じ生き物の図柄の繰り返しではなく、異なる個体と考えられます。名前が付いていたかもしれません。そこで土器にこれらの複数の生き物が登場する物語が描かれていたと、読み解いてみました。皆さんは、どう考えますか。

2月12日にはギャラリートークを行いました。



職員によるギャラリートーク



ミニ展示の縄文土器・土師器

埋蔵文化財センターの見学・体験学習・職場体験等のお申し込みは、

ホームページ <http://www.maibun.or.jp>
をご覧のうえ普及資料課まで

TEL 0285-44-8441 (代表)
FAX 0285-43-1972